

# カリマネの視点で描き直した グランドデザインを、 地域と連携しながら実現する

## 福岡県立小倉商業高校



◎「清く 明るく 健やかに」を学校のモットー、「フロンティア・スピリット」を建学の精神に掲げ、地域とともにある学校として、学校を核とした地域づくりに取り組んでいる。

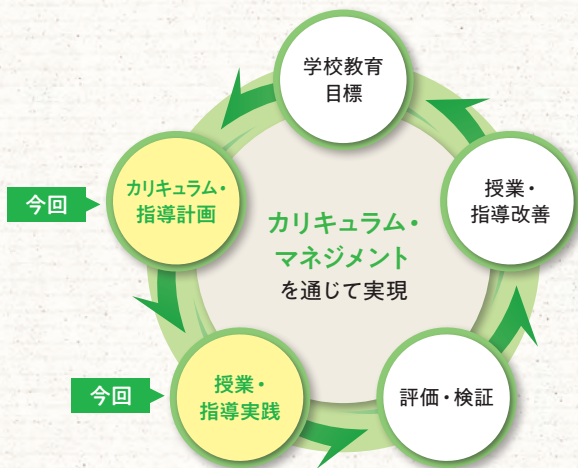
◎設立 1916(大正5)年

◎形態 全日制/総合ビジネス科、国際ビジネス科、ビジネス情報科、会計ビジネス科/共学

◎生徒数 1学年約240人

◎2019年度進路実績 国公立大は、山口大、下関市立大、北九州市立大などに8人が合格。私立大は、国士館大、日本大、九州産業大、中村学園大、福岡大などに延べ26人が合格。短大、専門学校進学64人。就職127人。

◎URL <http://kokura-ch.fku.ed.jp>



### 学校教育目標を意識して グランドデザインを作成

福岡県立小倉商業高校は、地域に根差した商業高校として100年以上の伝統を持つ。生徒は卒業後に約半数が就職するが、就職先のほとんどは福岡県内の地元企業だ。大学進学者を含めると、約8割が卒業後も地元に残る。

同校は、新学習指導要領の実施に向けて、地域人材の育成を念頭に、主幹教諭と指導教諭が中心となって既にグランドデザインを作成していた。しかし、それは、各分掌が策定した教育目標や指導方針が詰め込まれた状態のもので、それぞれの目標や方針の関係性が明確にはなっていないかった(図1・右)。

「ステークホルダーに、方向性・課題をより分かりやすく伝えられるように改善に着手しようとしたものの、どこから見直せばよいのか悩みました」と、主幹教諭で教務主任の木下祐彦先生は語る。

そうした中、指導教諭で研修主任・学年総括主任を務める松藤史紹先生は2019年3月、VIEW21編集集部が主催したカリキュラム・マネジ

メントに関するワークショップ(※1)に参加。講師の関西大学教育推進部森朋子教授の話の中で、学校教育目標の達成を意識した教育課程の構築手法を知った。そこで、学校が目指す方向性をシンプルに示すことができるグランドデザインのイメージが、一気に見えてきたと言う。

学校に戻ると、松藤先生はまず、「そもそも本校が地域から長年信頼を得られてきた理由は何か」という、学校の根本的な存在意義から考えることにした。その結果得られたのは、同校のモットーである「清く 明るく 健やかに」高校生活を送る生徒を育成できていることが、地域からの評価につながっているのではないかとということだった。

そのため、19年度のグランドデザインでは、「清く 明るく 健やかに」を最上位の目標に置き、「その目標を達成するためには、どのような資質・能力を生徒に育成する必要があるのか」「その資質・能力は、どのような教育活動を通して育成を図ることが可能か」といった手順を採った。すると、短期間でグランドデザインを見直すことができたと言う(図1・左)。

\*1 ワークショップの内容は、本誌2019年6月号・特集に掲載。





主幹教諭・教務主任  
木下祐彦  
きのした・すけひこ  
教職歴23年。同校に赴任して7年目。

指導教諭・研修主任・学年総括主任  
松藤史紹  
まつふじ・ふみあき  
教職歴26年。同校に赴任して6年目。

研修副主任  
新井勇治  
あらい・ゆうじ  
教職歴30年。同校に赴任して7年目。

3学年主任  
橋本あゆみ  
はしもと・あゆみ  
教職歴22年。同校に赴任して15年目。進路指導部。

商業教育総括主任 国際ビジネス科主任  
白石智代  
しらし・ともよ  
教職歴20年。同校に赴任して20年目。教務部。

総合ビジネス科主任  
秦陽子  
はた・ようこ  
教職歴18年。同校に赴任して2年目。生徒指導部。

「本校が目指す姿や、その実現のために必要な教育活動が系統的に示されたものになっており、かつシンブルで見やすい形にすることができたとと思います」と、松藤先生とともにグラウンドデザインの見直しに取り

組んだ木下先生は語る。

グラウンドデザインを見直したことで、3年間を見通しながら、教育目標として掲げた資質・能力を生徒に育成していくことを意識しやすくなったと、松藤先生は話す。

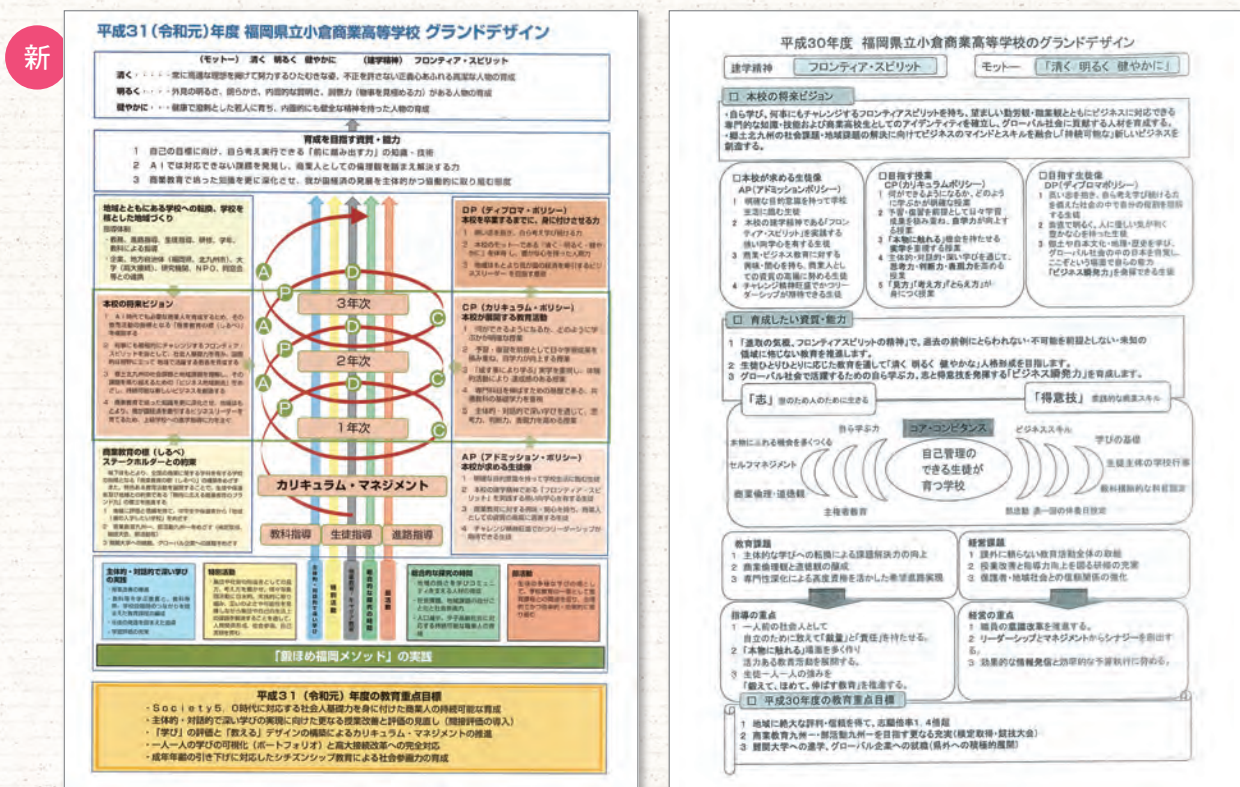
「以前は、自分が受け持っている学年だけに意識が向きがちでした。育てたい生徒像を明確にしたことで、各学年で生徒の資質・能力をどこまで高めて次の学年に引き継ぐかといった議論がしやすくなったと思います」

### カリマネ推進にあたって 探究学習の充実に着手

グラウンドデザインに基づいたカリキュラム・マネジメントの推進にあたって、同校が最初に改革に着手したのは探究学習だった。学校として育成を目指す資質・能力を備えた生徒を地域に送り出していく上で、すべての教育活動の軸として探究学習の充実を図ることが有効であると考えたのだ。

探究学習を軸に構築した3年間のカリキュラムは、まず1年次に「総合的な探究の時間」(以下、「総合探

図1 小倉商業高校のグラウンドデザインの進化



\*学校資料をそのまま掲載。  
 \*福岡県立小倉商業高校・令和元年度のグラウンドデザインの全体は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト (https://berd.benesse.jp) からダウンロードできます。「HOME」→教育情報→高校向け」をご覧ください。  
 \*プロフィールは2020年3月時点のものです。



究」を通じて、地域や社会が抱える課題や、その課題に取り組む地域の人たちの姿を知り、自分たちには何ができるのかを考えさせる。そして地域についての関心を高めさせてから、2年次に、ボランティア活動等の地域活動に自主的に取り組むように促す。そして、3年次の「課題研究」において、地域に密接にかかわる課題を生徒自身に設定させ、調査・研究・実験を通じた探究に取り組ませる。

### 地域の人たちの意見を カリキュラムに反映させる

同校の「総合探究」には、年度初めのカリキュラム編成時とその後の柔軟な運用に特徴がある。まず、編成時の特徴は、地域と連携し、地域の人たちの意見を取り入れてカリキュラムづくりを行っている点だ(図2)。同校の地域連携を主導する新井勇治先生は次のように語る。

「本校の文化祭である『倉商祭』では、商業活動を実験するという目的で、生徒自身が商品の仕入れから店舗運営、物品販売までを行う活動に取り組みますが、それは地元企

業の協力なしでは実現し得ないことです。本校は地域とのつながりが強いので、カリキュラムを地域の人たちとともに作るができます」

19年度の「総合探究」では、最初に教師間で練ったカリキュラム案を、地域人材育成事業などを行っている一般社団法人「まちはチームだ」の中川康文さんなどに見てもらった。返ってきた感想は、「もっと生徒がポジティブな気持ちになれるテーマがよい」というものだった。中川さんは語る。

「北九州市は、公害や人口減少を始めた様々な社会課題に取り組んできた課題先進都市です。『君たちはこの地域でいろいろな社会課題に取り組むことが可能で、それは世

界の課題に取り組むことにもつながっていくんだ」といったメッセージを発信すれば、生徒はより前向きな気持ちで課題に向き合えるのではないかと話しました」

それを受けて「社会や地域をよくしたいし、よくできるはずだ」といった強い思いと希望を持って活動するような大人たちに触れる機会を多くカリキュラムに組み入れることにした。また、起業支援などに取り組む中川さんを講師としても招いた。

「総合探究」のカリキュラムの中には、「夢授業」という地域の職業人を学校に派遣する活動を行う、九州キャリア教育研究会による授業も組み入れた。同研究会会長の木原大助さんは語る。

「職業人の話を聞く時の生徒の熱心さが、他校の生徒とは違って目を見張るものがありました。きっとそれまでの活動を通じて、『地域の大人から話を聞くことは、自分の生き方を考える上で大

「今の時代は、企業に勤める以外にも、多様な働き方が可能になっています。高校生は社会の未来ですか

図2 令和元年度 第1学年  
「総合的な探究の時間」

1回	オリエンテーション/探究の7つのプロセス
2・3回	キャリアワークショップⅠ(その1・2)
4回	探究の7つのプロセスを振り返る
5回	社会課題、地域課題から地域を見つめる
6回	テーママイニング 可視化される未来
7回	中・日本・福岡県・北九州市が抱える社会課題とは?
8回	社会課題の解決に向けた取り組み
9回	1学期の学びを振り返る
10・11回	これからの社会と求められる人材(その1・2)
12回	探究の振り返り(クラス別)
13・14回	2030SDGsワークショップ(その1・2)
15回	2030SDGsワークショップ振り返り
16回	講演(北九州市役所 職員)
17回	講演(国造平氏/中川康文氏)
18回	探究の振り返り(クラス別)
19回	たった一人の高校がなぜこのプロジェクトをおこし、やり上げたのか? 講師(高校教員)
20回	講演(北九州市立大学 地域創生学群 教授)
21回	探究の振り返り(クラス別)
22回	倉商祭を別の角度から見てみよう
23回	生徒会副会長による倉商祭ゴミ問題についての問題提起
24回	探究の振り返り(クラス別)
25・26回	社会課題解決のためのビジネスプラン作成講座(その1・2) / 日本経済新聞社
27回	各課題のリフレクション/「夢授業」準備ガイダンス
28・29回	九州キャリア教育研究会「夢授業」(その1・2)
30回	「夢授業」準備ガイダンス
31回	探究の振り返り(クラス別)
32回	探究を始めた高校生(小倉商業Ver.)
33回	探究を始めた高校生(福岡の高校生Ver.) / 講師指導・キャリア教育支援 職員
34・35回	キャリアワークショップⅡ(その1・2)

\*学校資料を基に編集部で作成。



小倉商業高校の「総合的な探究の時間」を支えてきた地域の人たち。左から中川さん、岡さん、木原さん。地域の職業人が集うワーキングスペース秘密基地にて。





左から九谷さん、有廣さん。探究的な学びの経験と成果を後輩である1年生に話した。

ら、自分も社会に身を置く立場として、多様な可能性を生徒に示すチャンスをいただけるのは、私たちにとっても貴重な機会です」

### 生徒の状況を見ながら カリキュラムを柔軟に変更

同校の「総合探究」のもう1つの特徴は、カリキュラム編成後の柔軟な運用だが、それはすなわち、年度当初に立てた計画に縛られず、生徒の状況に合わせてカリキュラムを運用しているという点だ。

例えば、2学期のSDGs（\*2）ワークショップで視点を学んだ際に、生徒の社会や地域への関心は

高まったように見えた。しかし、直後に開催された倉商祭で大量のゴミが発生したことから、「身近な課題とSDGsがつながっていることに、多くの生徒が気づいていないと感じた」（松藤先生）と言う。そこで、同じ気づきを持った当時の生徒会美化委員長、3年生の有廣陽さんに、1年生の前でゴミ問題について話してもらった機会を設けた。

「私たちは商業を学んでいるけれども、これからのビジネスは、売上や利益とともにゴミを減らすなど、環境との両立を考えないと、社会に受け入れてもらえなくなるのではと問題提起をしました」（有廣さん）

また、学校の特別プログラムで地域の大人たちと一緒にビジネスアイデアの構築などに取り組んできた3年生の九谷和未さんにも、2月末に1年生の前で地域での探究活動について話してもらったことになった。

「学校を出て地域の人と一緒に活動するのは勇気があることです。でも、0.5歩でもよいから踏み出してみると、学校の中にいるだけでは知ることができなかった考え方を知り、世界が広がっていくのではと伝えました」（九谷さん）

### 商業の視点から 地域の課題に取り組む

同校では、既に3年次の「課題研究」の改革にも着手していた。

同科目では3学期に、3年生が2年生の前で、自分たちの研究内容や成果を発表するポスターセッションを設けている。2年生は3年生の話をヒントにしながら、自分が3年生になった時に研究してみたいテーマを絞って考える。研究テーマは先輩が取り組んだテーマを引き継いでもよいし、自分で新たに設定してもよい。また、個人研究、グループ研究のいずれも可としている。

これまでのテーマを見ると、「門司港を活性化させるための商品開発」「竹害を減らすことをねらいとした竹のスマートフォンケースの開発」など、生徒が学んできた商業の視点から地域の課題を捉えたものが多いことが分かる。そのため、「課題研究」においても、地域との連携が欠かせない。「課題研究」担当の白石智代先生はこう話す。

「商品開発は、生徒の力だけでできるものではありません。地元企業の協力を得て、社員の方と一緒にア

イデアを出しながら取り組んでいきます」

地域に出て行う活動は、生徒たちが商業を実践的に学ぶ貴重な機会にもなっている。「課題研究」担当の秦陽子先生は話す。

「私が担当したグループは、マーケティングの探究で、商業施設の来店客にアンケート調査を行いました。生徒にとっては『もっとこういう調査項目にすればよかった』といった反省点の多い結果になりました。授業で学んだことを、生徒が現場で試すよい機会になりました」

19年度に「総合探究」を経験した生徒たちが、3年生に進級するのは21年度のことだ。「課題研究」担当の橋本あゆみ先生は、その時に向けての展望をこう語る。

「1年次の『総合探究』では志を身につけ、2年次に地域や社会のために何ができるのかを考えます。そして、3年次にそれまでに学んできたすべてのことを統合して『課題研究』に取り組むという流れを構築したいと思っています。探究学習を軸に、すべての生徒が『清く明るく健やかに』学べる3年間のカリキュラムの実現を目指していきます」

\*2 Sustainable Development Goals の略。2015年に国連が掲げた持続可能な開発目標のこと。「貧困をなくそう」「飢餓をゼロに」など、17の目標と169のターゲットから成る。